

愛媛大学SEA (Study English Abroad) プログラム 構築に係る報告

中山 晃

愛媛大学教育・学生支援機構英語教育センター

Report of Developing Ehime University Study English Abroad (SEA) Program

Akira NAKAYAMA

English Education Center, Institute for Education and Student Support, Ehime University

はじめに

愛媛大学英語教育センター(以下、英語教育センター)は、主として、本学の初年次英語教育プログラムにおける企画・開発・実践を行う部署として、平成13年度に設置された。設置当初から平成20年度までは、特に一回生向けの必修英語を統括する部署として、「統一シラバス・統一教科書・統一試験」を徹底し、英語教育カリキュラム全般の改善と安定化を図ってきた。一方で、2回生以降の英語教育については、特に順次性・系統性のあるプログラムは提供しておらず、初年次英語教育で培ったスキルを、さらに伸ばすための授業科目の設置が急務な課題であった。そこで、平成21年度から、発展的科目群として、2回生以上の一定レベルの英語力を身につけた学生に対し、「英語プロフェッショナル養成コース(以下、プロコース)」を設置することとなった。なお、このプロコースについては、既に報告されているので(Murphy, 2014; 中山, 2013)、本報告からは割愛することにする。このプロコースは、当初、少人数授業の科目を8科目提供し、学生は、所定の単位数を取得することで修了することができたのであるが、より実践的な英語使用の機会、すなわち海外研修など、実践的な場面での英語のトレーニングの機会を求める声と必要性が、プロコース実施初年度から受講者・教員から出始めた。本報告では、こうした要望と必要性に対応すべく、英語教育センターが行ってきた取組を、これまで獲得してきた学内外の競争的資金の紹介と実績、波及効果をまとめ、平成27年度から実施している「愛媛大学SEAプログラム」がどのように構築され、機能し始めてきたのか、広く報告するものである。

獲得した補助事業と実績

平成22年度以降、英語教育センターでは、下記の4つの資金を獲得してきた(表1)。以下、時系列的に、それぞれの事業内容と実績をまとめる。

表1. 獲得した補助事業一覧

年度	種別	事業名	期間
H22	国際GP	英語プロフェッショナル養成コースにおける短期語学研修科目の創設	2年
H25	国際GP	『Aidai English Policy』の構築に向けた英語圏への海外留学(長期)及び語学研修(短期)プログラム群の精緻化と拡張	2年
H26	国際GP	愛媛大学SEA(Study English Abroad)プログラムの開発: 上級レベルの短期語学研修に参加する学生への支援	1年
H27	JASSO支援事業	愛媛大学SEA(Study English Abroad)プログラム	1年

注) 国際GP: 国際連携促進事業の略称,
JASSO: 日本学生支援機構の略称

(1) 平成22年度国際連携促進事業(国際GP)

事業名「英語プロフェッショナル養成コースにおける短期語学研修科目の創設」(2年間)が、海外研修科目の設置のはじめとなった。この補助事業では、プロコースに選択科目の1つとして「International English Experience」(2単位)を設けることを目的として、初年次に研修先候補地(大学)の視察と選定、そして2年目に実際に学生を研修先に派遣するというものであった。当初、派遣先の候補地として、イリノイ大学スプリングフィールド校とハワイ大学マノア校の2つが挙げられた。理由としては、教員間で交流があり、また現地の様子についても、ある程度事前に情報が得られやすいという利点があったためである。

最終的には、学生から人気の高いホームステイのプログラムが組めること、また、世界的にみても英語教育分野における研究（第二言語習得研究）の拠点であることに鑑み、ハワイ大学マノア校のNICE (New Intensive Courses in English) プログラムを研修先として選定した。このNICEプログラムを研修先とした選択科目は、夏季集中講義として開講され、平成23年度に3名、平成24年度に2名が参加した。

(2) 平成25年度国際連携促進事業 (国際GP)

事業名「『Aidai English Policy』の構築に向けた英語圏への海外留学(長期)及び語学研修(短期)プログラム群の精緻化と拡張」(2年間)は、愛媛大学の学生の英語力の底上げと海外留学への関心を高めるために、新機軸の語学研修プログラムの開発を目的として始動した。特に、海外留学(長期)の派遣先の開拓として、カリフォルニア・アカデミック・プログラム(CAP)を実施しているカリフォルニア大学アーバイン校エクステンション(UCI Extension)との協定締結を主導し、現在、一部の私立大学(例えば慶應義塾大学等)のみで実施しているプログラムを、国立大学としては初となる協定締結校へと導いた。一方、語学研修(短期)の派遣先の拡張としては、東南アジア諸国の語学学校(ELS Language Centers)への試行的派遣も行ったが、最終的にカリフォルニア大学ロサンゼルス校エクステンション(UCLA Extension)及び英国バンガー大学日本研究所(Bangor University)との学生派遣協定を締結し、私立の語学学校やコミュニティー・カレッジの枠を超えた海外の大学レベルの派遣先の増加を実現できた。補助事業終了間際には、英語圏へのプログラム群(主に英語学習に特化したもの)をまとめて紹介するホームページを開設し(図1)、これにより学部学科を問わず参加できる留学・研修プログラムを一元的に閲覧することができるようになったことは、特筆すべき成果と言える。



図1. SEAプログラム・ホームページ
(URL: <http://web.eec.ehime-u.ac.jp/SEA/index.html>)

(3) 平成26年度国際連携促進事業 (国際GP)

事業名「愛媛大学SEA (Study English Abroad) プログラムの開発: 上級レベルの短期語学研修に参加する学生への支援」(1年間)は、上記課題の2年目と並行して実施され、特に、一定以上の成績基準を満たした学生に対し、研修先の授業料等の一部または、学生渡航費の一部に充当する学生派遣援助費を用意し、海外研修にかかわる費用を選択的かつ重点的に支援することで、加速度的に学生の英語力(実践力)を向上させることを目的として実施された。実績として、予定していた学生渡航補助が実施され、合計5名の学生に英語の上級プログラム参加を支援することができた。内訳としては、米国ワシントン大学シアトル校(エデュケーション・アウトリーチ)でのAcademic Englishプログラムへの参加(2名)と米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLAエクステンション)でのIECPプログラムへの参加(2名)、さらに英国バンガー大学(日本研究所)でのトリニティーファウンデーションプログラムへの参加(1名)となった。特に、UCLAエクステンションの研修プログラムは、学生ビザ(F-1ビザ)を必要とするフルタイム・プログラムの内容であり、授業内容のレベルの高さだけでなく、実際の英語学習時間も大変充実している同プログラムへの参加を支援できたことは有意義なことと言えよう。

(4) 平成27年度日本学生支援機構・海外留学支援制度(協定派遣)

事業名「愛媛大学SEA (Study English Abroad) プログラム」(1年間)では、一定以上の成績等の要件を満たした学生への渡航補助を主な目的として、原則、学生派遣協定書を交わしている研修先への派遣と補助を行った。渡航先によって、補助金額は異なるが、この補助により、8~10万円の範囲で、学生を経済的に支援することができた。なお、この支援制度を活用した派遣実績としては、UCLA Extensionに1名、ワシントン大学シアトル校に1名、英国バンガー大学に3名となった。

全般的実績

協定締結校

上記4つの補助事業を通して、英語教育センターは、教育・学生支援機構と海外の各研修先との学生派遣協定締結を主導してきた。以下に、協定締結校及びプログラムの名称をまとめる(表2)。

表2. 学生派遣協定締結校

国名	機関	締結日	研修期間
米国	ワシントン大学シアトル校	平成24年 9月14日	短期 (3週間)
米国	カリフォルニア大学アー バイン校	平成26年 11月25日	長期 (9ヶ月)
米国	カリフォルニア大学ロサ ンゼルス校	平成26年 12月2日	短期 (4週間)
英国	バンガー大学日本研究所	平成27年 1月12日	短期 (3週間)
カナダ	ブリティッシュ・コロ ンビア大学	平成27年 12月15日	短期 (4週間)

学生派遣実績

平成22年度以降の学生派遣の実績を以下にまとめる(表3)。

表3. 学生派遣の実績状況(協定締結検討校も含む)

国名	機関 (在学期間/学習時間)	春季	夏季
米国 (長期)	カリフォルニア大学アー バイン校(3クォータ)		1名(H28) (9月出発)
米国	ハワイ大学マノア校* (週18時間以内)		3名(H23) 2名(H24)
米国	カリフォルニア大学ロサ ンゼルス校 (週18時間以上)	2名(H26)	2名(H27) 1名(H28)
米国	ワシントン大学シアトル校 (週18時間以内)		17名(H25) 15名(H26) 7名(H27) 2名(H28)
英国	バンガー大学日本研究所 (週18時間以上)		2名(H26) 7名(H27) 4名(H28)
カナダ	ブリティッシュ・コロ ンビア大学 (週18時間以上)	2名(H27)	
アイルランド	ダブリン・シティ大学* (週18時間以上)		1名(H28)

注 ハワイ大学とダブリン・シティ大学については、協定締結検討校である。

波及効果

本節では、上記で紹介した語学研修に参加した学生が、帰国後に様々な異文化・国際的なイベントに積極的に参加するなど、海外研修の経験を連鎖的に活用し始めた事例や、本プログラムを利用して長期留学を実現した事例を個別に報告する。

事例1：英国での文化的体験を活用した事例

H君(教育学部)は、夏季語学研修(英国バンガー大学)で得た経験を活かし、現地で大変美味しいと感じた「フィッシュアンドチップス」を、EVN起業体験プログラムを通して、愛媛県松山市内の大街道商店街で販売した。チーム名「愛グルメ株式会社」として出店した店舗が、最優秀賞を受賞し、平成27年10月11日にEVN起業体験プログラム受賞式にて表彰された。本人の言葉として、『現地で直接感じた文化や風土の違いは、本当に真新しいものばかりで毎日が刺激と驚きの連続でした。イギリスでの学びを勉学のモチベーションとして維持することはもちろん、帰国し

て実践の場でアウトプットすることが何より大切であると思います。今回は起業イベントという形でしたが、「海外で体感した素晴らしい文化を日本人にどのように発信していくか」という問題意識の下、トライし結果を残せたことは、自分にとって大きな自信となりました。』とコメントしているように、海外研修経験を次なる行動の糧として、活用していることがうかがえる。

事例2：大学が主催する国際交流イベントに参加した事例

Tさん(スーパーサイエンス特別コースに在籍)は、夏季語学研修(ワシントン大学シアトル校)に参加した時の様子を、他の研修参加者らと共にスライドにまとめ、積極的に国際交流イベント参加にて、異文化体験の様子を発表した。また彼女の言葉として、『この留学で得たものは、語学よりも大切な人と人の付き合い方が根本の部分だと感じました。』とコメントしており、語学を超えた人との交流について、学ぶことができたまとめている。



図2. 発表の様子

事例3：「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム～」に採択され長期留学を実現した事例

O君(法文学部)は、同制度の第5期派遣留学生として、「世界トップレベル大学等コース」の申請枠において、287人(47校)中、69名(26校)の1人に選ばれた。この選出により、O君は平成28年9月から約10ヶ月間、愛媛大学SEAプログラムにおいて唯一の長期留学研修先である米国カリフォルニア大学アーバイン校に通うことになった。現地では、専門である国際法を勉強し、グローバル化した現代における社会の様々な課題に対処していくための高度な知識とマインドを身につけていくことが期待されている。

現地に到着したばかりであるが、本人からのコメントが届いているので紹介すると、『アーバインの気候は穏やかで、治安も評判通りの安全な都市だ。そしてカリフォルニア大学アーバイン校は全米でも有数の名門大学であり、キャンパスの設備や学生・教授陣の質は非常に高い。特に私のように長期留学が初めての者には大変整った環境といえる。愛媛大学から派遣された学生であるという自覚を持ち、勉学に励むとともに10年後を見据えた将来のキャリ

ア構築を行いたい。』と強い意気込みを語ってくれた。



図3. 正門にて

事例4：海外研修への参加によって英語学習意欲が高まり 英語力が飛躍的に向上した事例

A君（工学部）は、平成26年度の夏季休業中に、約3週間のマレーシア内の語学学校（ELS Language Centers）での語学研修に参加した。本人の言葉として、『理系学部
に所属しているため、留学する前は英語を継続的に学習することが困難であり、いつか自分の中で英語学習が義務のようになっていた。留学してみるとリビア、イラク、南アフリカなどのそれぞれ母国語の違う人と英語でコミュニケーションをとれることが何よりも楽しかった。授業よりも、授業後のほうが英語を使ってお互いの国のことについて話したり、それぞれの趣味について話したり、得るものが大きかった。英語を使うと様々な人と意思疎通ができるということ学んだことが一番の留学での気づきであった。帰国後はリスニングの教材や文法を学ぶのではなく、コミュニケーションのツールとしての英語を学ぶことに焦点を当て、スピーキングを主に勉強した。映画や友人へのメールを通じて英語への接触回数も増やすことによって、英語が常に身近なものになるようにした。』と語っている。彼の言葉を裏付けるかのように、留学前・後のTOEICの得点を比較すると、200点以上（平成26年の4月に645点→平成28年1月に870点）向上しており、留学経験の教育効果が見て取れる。

Yさん（農学部）は、平成26年度の夏季休業中に、約3週間の英国バンガー大学での語学研修に参加した。本人の言葉として、『短期間ではあったが実際に海外で少し生活してみたことで、「勉学」としての英語ではなく、「人々の生活の一部」となっている英語を学ぶことができました。英語を通して現地の人の文化やあたたかさに触れることができたとき、英語の勉強がさらに楽しくなりました。帰国後は、私をあたたかく迎えてくれたホストファミリーにいつか再会したとき、もっと心から会話でき、あのお礼を伝えられるようになることを目標に、日々勉強に励んでいます。』と海外研修の経験をさらなる英語学習への意欲へとつなげるコメントをしている。彼女の言葉を裏付けるかのように、留学前・後のTOEICの得点を比較すると、

A君同様に、200点以上（平成26年4月に535点→平成28年1月に735点）向上しており、留学経験の教育効果が見て取れる。

まとめと課題

本報告では、平成22年度から平成28年度までの7年間において、英語教育センターが取り組んできた英語圏への海外留学・語学研修のプログラムの構築過程をまとめた。基本的な方針としては、単なる語学学校への派遣ではなく、海外の大学の附属機関に派遣することに特化したプログラムとして、英語教育センターの愛媛大学SEAプログラムは構築されている。こうしたプログラムへ延べ67人の学生を派遣できたことは、大学の戦略的目標にも寄与するものである。

短期間の海外研修の教育的効果については、リスニング力の向上がある程度期待できるという研究結果（千葉、2007）が報告される一方、英語学習意識の肯定的変容（千葉、2007）やコミュニケーションを図ろうとする意欲（Willingness to Communicate：WTC）の維持（中平、2007）や学習動機を維持してゆくための様々な事後学習・サポートプログラムの設置（眞田、2009）が課題となっている。

本稿で取り上げた学生の事例では、学内の短期研修報告の機会を利用したり、学外での様々なイベントに参加したりするなど、それぞれの興味・関心を、海外での英語学習経験を活かして、深めている様子がうかがえる。また、自ら中・長期的展望をもって、帰国後の英語学習意欲をしっかりと維持している様子もうかがえた。

今後は、大学生生活の比較的早い段階で、海外研修に参加した学生の帰国後の様子について、追跡調査を行い、どのように海外留学機会・経験を継続的にそして連鎖的に活用しているのか、学生が参加したプログラム内容・性質（富田・近森・中山・大谷・山本・小野、2015）と合わせて検討する必要がある。

謝辞

本報告に際し、これまで4つの補助事業の支援を受けた（表1を参照）。ここにあらためて感謝の意を表す。その他、事例報告に際し、5名の学生さんから後輩へのエールを込めたあたたかいコメントをいただいたことを心より感謝いたします。

引用文献

- 千葉克裕（2007）。「短期留学の学習意識への影響：留学前・後のアンケート調査の結果と研究上の問題点」第46回大学英語教育学会大会 要綱、172-173。
眞田亮子（2009）。「必修科目としての海外語学研修」第48回大

学英語教育学会大会 要綱, 361.

Murphy, R. P. (2014) The EEC's English Professional Course: History, Structure, and Results. *Journal of Faculty and Staff Development in Higher Education*, Vol.12, 1-8.

中平里実 (2007). 「短期留学が日本人英語学習者に与える影響—情意, 動機付け, コミュニケーションへの意思の変化—」第46回大学英語教育学会大会 要綱, 174-175.

中山晃 (2013). 「4技能の統合プロセスを追う: 愛媛大学「英語プロフェッショナル養成コース」を事例として」『大学英語教育学会 中国・四国支部紀要』第10号, 80-91. (シンポジウム特集論文)

富田英司・近森憲助・中山晃・大谷千恵・山本昭夫・小野由美子 (2015). 「国際交流プログラムを評価するループリックの開発」『大学教育実践ジャーナル』第13号, 9-15.